Fukushima National College of Technology

鈴木正三における職業倫理について

On the Vocational Ethics in Suzuki Shosan

（平成16年9月受理）

笠井　哲*（KASAI　Akira）

Abstract

The purpose of this paper is to consider the vocational ethics in Suzuki Shosan. He explained the vocational ethics in his main published work *Banmin Tokuyou.* His vocational ethics was based on the principle, namely, the worldly things are Buddhism. He looked on the vocation as the other self of the Buddha. Every vocation as the training improved him and relieved his mind. There was the Japanese vocational ethics. It continues living in the Japanese mind.

1．はじめに

江戸仏教は、表面的には幕府の政策に押さえ込まれて停滞したように見える。しかし実際は、キリスト教、儒教、後には神道との対決を迫られて、いっそうの民衆化や主体化が行われたといえる。本稿で取り上げる鈴木正三も、そうした仏教の民衆化、日本的な主体化の思想家として捉えることができる。

正三自身は出家していたにもかかわらず、出家希望の人にはそれを押しとどめ、奉公こそ修行の道であるといい、在家にあって家職に励むことが仏道であると説いている。鎌倉新仏教の出現以来、在家が重視される傾向はあったが、正三ほど積極的に在家、それも各自の職業こそ仏道修行であると説いた人はいなかった。

正三の思想は、武士という職業に生きた体験と、ようやく達成された国内の統一、身分制度の確立、さらに厳しい思想の対決という時代の中で、民衆が物心ともに豊かで平和に、しかも現実の社会の中で、真の自己を見出していくには、どうしたらよいかという主体的な思索の結果であったといえる。正三は、士農工商を単なる身分制度としてではなく、職能として捉える、一個の人間としての自覚が出発点となっている。

本稿の目的は、鈴木正三における職業倫理について考察することである。正三は主著『万民徳用』において、武士・農人・職人・商人の順で、独自の職業倫理を説いている。それを検討するに先立って、彼の思想的な基盤をみておきたい。

2．縁起論と恩の思想

キリスト教と対決した『破吉利支丹』等に明らかなように、正三は論理が鋭く理論的であった。彼は、『盲安杖』、『万民徳用』に自己の思索を体系的に述べている。

鈴木正三の宗教的自覚は、人間の浅ましさ、すなわち罪の深さの自覚に始まった。彼はまず自分の利ばかりを求め、前後のことをわきまえず、貪りや怒りや邪見の心をもっぱらとして、悪業煩悩を離れず、日夜苦しみ、休むときがない。それは、煩悩と三毒に犯された大病人である凡夫という自覚であるという。正三はいっている。

凡夫はまず病を知るべきである。生死無明の心中に真理と背反した見方や無知の病がある。貪りや怒りや邪見の病がある。勇気を欠き、道にそむく病がある。三毒の心を根本として、無数の煩悩の病となる[(1)]。

このことを自覚したら、その心を除滅し、病を治さなくてはいけない。それには、我執の眼を断ち、仏教の根本真理を知り、本来の自己、すなわち真実の自己に至り、自由になることが大切であるとした。

仏法修行は慮知分別の心を去て、著相の念を離れ、無我の心に至て私なく、物に任て自由なり[(2)]。

すなわち、宇宙そして自己もその分身である一仏だけを認め、その仏に帰依して、自由自在の境地に生きること

＊ 福島工業高等専門学校　一般教科（社会）　（いわき市平上荒川字長尾30）

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

が彼の宗教的理想であった。決して、死んだ後の成仏を求めたのではなかった。ただ、いまを生きて、自由に死ぬことを習うこと、生死をわきまえて捉われないことがまず必要であると、強調している。したがって、正三の宗教心は、自己への反省とそれに対応する仏への帰依に始まったのであって、これは仏教でいう「縁起論」を主体的に受け止めたということである。

縁起論に続いて、正三が強調したのは「恩」の思想である。恩についての言及は、各所に見られるが、比較的まとまりのよいところをあげてみよう。『盲安杖』で、次のように説いている。

正三はいう。何事をするにも、他人の心になってやれ。他人のことを忘れてはならない。まず上は四つの恩を知らねばならない。一には天地の恩、二には師の恩、三には国王の恩、四には父母の恩である。天地の恩というのは、地・水・火・風の四つも元素を天地より借り受けて、大地の上に体を置き、衣服や食物や、水や火や家財道具などもみな、天地の恩恵を受けてできているものである。そのことをよく反省してみなければならない。次に師の恩というのは、迷っている人間が地獄・餓鬼・畜生の三つの世界の苦しみ災いを離れ、輪廻転生することを免れ、悟りに至るべきいろいろの教えから受けている御恩は、言葉では言い尽くせないものがある[3]。

このように、「私」という存在は諸恩のおかげなのである。そうした恩の理をよく悟って、各自が自分を強く守って積極的に生きなくてはならない。それがすなわち、報恩であるという。「報恩」とは、各自の立場で自分が三毒を避けて、精一杯活かすことであった。それが、仏道修行というものであった。

3．世法即仏法

次に問題にしなくてはならないのは、正三における仏道修行の真の意味である。

例えば道元は、仏道修行は出家を第一にしている。彼は俗世間を離れて、ひたすら坐禅することを強く主張している。道元の立場は、仏法を上位に見ているといえよう。

だが、正三は「世法即仏法」を打ち出して、仏道修行の意味を大逆転する。正三がもっとも基本としたのは、「修行の念願」であって、出家した僧の形ではない。『万民徳用』のはじめの修行の念願は、「万徳を旨として修行し給へかしとの念願」、「三宝の旨を守て修行したまへかしとの念願」、「成仏の処に眼を着て修行したまへかしとの念願」、「三界出離の修行し給へかしとの念願」、「世法を則仏法になし給へかしとの念願」[4]というものである。

例えば、出家の件をみると、

> 仏法修行は三界出離の法也。故に出家と名付。若三界出離の旨なくば出家にあらず。願は三界出離の修行し給へかしとの念願なり[5]。

と三界を離れるという強い願がなくては、形の上だけ出家してもまったく意味がないことをいったと考えられる。また、

> 仏語に、世間に入得すれば出世あまりなしと説給へり。此文は、世法にて成仏するの理なり。然ば世法則仏法也。華厳に、仏法は世間の法に異らず。世間の法は仏法に異らずこのごとく説給へり。若世法にて成仏する道理を用ひずば、一切仏意をしらざる人也[6]。

と、世法は即仏法であると断言してやまないのである。

世法とは一般社会の道理、理法をいう。仏法は、悟った仏の心境を指す。この両者が即同一であるというのが、正三の信念である。出家した人が三界を離れる修行をするのと同じように、在家の人も修行するならば、救われるという強い信念なのである。したがって、仏法の修行は次のような十の理由で世法と合致するという。

①仏法の修行は、煩悩を退治するものである。心が弱くてはかなわないものである。勇気を出して如何なる困難をも克服して、修行に努力する心が大切である。

②また仏法の修行は、禁戒を堅く守って、仏祖の教えに背かず、不正の心を退治し、善心となり、理非分明にして理を離れて、慈悲正直で万民を救うから、この心は諸法度に使用される宝であるとしている。

③また仏法の修行は、我見を離れて、自他無差別にして、六の和合を用い、誠の心をもって、上四恩に報じ、下は三界の衆生を救うから、この心は五倫の道を正しく行う宝と見ている。

④また仏法の修行は、慮知分別の心を去って、着相の念を離れ、無我の心になり、私なく、物に任せて自由である。このような心は、諸芸能において最も大切な心であるから、仏法は諸芸能に使う宝というのである。

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

⑤また仏法の修行は、邪険の心を除滅する。それで奢る心、へつらう心、貪る心、名聞利養の心がなくなる。このような心は、渡世に使う宝であるといっている。

⑥また仏法の修行は、すべて差別の心を取り去るものである。この心は、すべての差別の心を克服して一心に留まる。この一心は、すべての所作の上に用いうる宝であるという。

⑦また仏法の修行は、いろいろの業の障害を滅尽して、一切の苦を去る。この心は、士農工商の人々の上に用いて身心安楽となる宝であるという。

⑧また仏法の修行は、不浄穢悪の心を去り、清浄無碍の心となり、苦を楽となし、悪を善となす。したがって、この心は万事に使う宝であるという。

⑨また仏法の修行は、無知の心を去って三毒の心を離れる。この心は諸煩悩を断じて、心の病がなくなる宝であるという。

⑩さらにまた仏法の修行は、有為の法を断じて本源自性にかなうとしている。そしてこの心は不生不滅にして、極楽浄土に留まる宝であるという因縁によって、形成された有為法を断じて本源の自性にかなう心を得て、この心こそ不生不滅で永遠のもの、これこそ極楽浄土に留まる宝と見ている。

そして正三は、仏は万徳円満であるという。仏法の宝も、無数無限である。しかし、仏弟子たちが名利に留まる時は、三宝も威力を失い、光もうすく万民は無明の闇に迷う。仏弟子たちが、仏意にしたがって解脱の道に赴くときは、三宝の威光も現れ、国土も明らかにして衆生も安心する。しかし悲しいことに、今日の仏弟子たちは仏意に背いている、と心から嘆いている[7]。

正三の立場は、いわば無学派的、超宗派的なので、仏道修行といっても、自分の心に煩悩や汚れがまつわりつかないようにする行為である。だから、坐禅がいいと思う人は坐禅でよく、念仏が適う人は念仏でよく、それも出家してやる必要は認めなかった。

田を耕しながら、魚を獲りながら、鳥を撃ちながら、自分の汚い心を殺すべしと教えている。心の病を救い、苦を去って身心安楽にし、そのまま極楽浄土に至るようにするのが修行であるという。こうして自分と闘って、自分を救うのが修行であるが、外の敵より内の敵と闘う方が難しい。正三が主張してやまなかったのは、法身堅固の心、兵のような心であった。

4. 職業哲学の展開

大乗仏教は、自他共存の教えであるから、菩薩の行為が自利、利他、そして広く社会、人類へと十の境地に対応して進み、それぞれの境地に対応する十の倫理、すなわち十善戒が述べられている。これが古来、大乗仏教の根本倫理とされてきた。それは社会的な性格もかなり強いのであるが、残念ながら「職業」というものの意義を考えるまでに至っていない。その点、正三は大乗仏教の華ともいうべき華厳哲学の思想を自分なりに消化して、「職業哲学」を創造した。すなわち、宇宙の一切の存在は仏の顕現、仏の分身であるから、一切の職業は仏の現れである。あらゆる職業が神聖であり、平等であって、社会に役立つ職能であるとみるのである。

正三はいう。

> 本覚真如の一仏、百億分身して世界を利益したまふなり。鍛冶番匠をはじめて、諸職人なくしては、世界の用所、調べからず。武士なくして世治まるべからず。農人なくして、世界の食物あるべからず。商人なくして、世界の自由成るべからず。この外あらゆる事業、出来て、世のためとなる。天地をさしたる人もあり、文字を造出たる人も有、五臓を分て医道を施人もあり。其品々限りなく出て、世のためとなるといへども、唯是一仏の徳用なり[8]。

このように、すべての職は、みな元は同じ一仏の働きの現れであるから、形は違ってもみな世のためになる。したがって、各自の職業、仕事に励むことこそが、仏に仕える仏行に他ならないというのが正三の職業哲学なのである。

> 何の事業も皆仏行なり。人々の所作の上において、成仏したまふべし。仏行の外なる作業有べからず。一切の所作、皆以て世界のためになる事を以てしるべし。仏体をうけ、仏性そなはりたる人間、意得あしくして、好て悪道に入事なかれ[9]。

各自のこの身もまた仏性をそなえている存在である。したがって、それを自覚して、横道にそれることなく各

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

自の職業に励むことが、そいのまま仏道の修行の成就、すなわち成仏となるという。正三は、職業というものを仏道の修行、すなわち人間の完成ないし自己救済の努力へと結び付けている。

職業を人間の完成への修行と見なそうとするのは、日本人の長い間の伝統であった。だからこそ苦しい仕事にも音をあげず、一つの仕事、一つの会社でこつこつ励むのに意味を見つけているのではなかったであろうか。職業を、単なる金儲けの手段と考えることは、よしとはしなかったのである。一つのことに励むことで、自分を磨いていこうとする。正三の創始した職業哲学は、いつしか日本人の職業哲学そのものになっていったといえよう。職業を精神化することで、低賃金長時間労働や自己犠牲を強いてきたという見方もできる。労働条件を改善することは大事なことで、より進められなくてはならない。しかし、職業というものが完全に生活の手段に過ぎなくなると、それでは人生から崇高なものが失われ、日常生活が物質的なものになってしまうであろう。

5．武士日用

四民のうち、まず武士の職業倫理について考察しよう。『万民徳用』に、次のように書かれている。

ある武士が次のような質問をした。仏法と世法、車の両輪のようであるというが、しかしながら仏法がなくても、世間において不自由なことはない。どうして車の両輪にたとえるのか。

仏教がなくても、世間の倫理は行われているではないかというこの問は、支配階級の精神的支柱となりつつあった儒教を意識したものである。

これに対して正三は次のように答える。

仏法と世法が二つあるのではない。仏様の言葉に、世間の中に入ってしまえば、別に出世間があるわけではないとある。仏法も世法も、道理を正し、正義を守って、五倫の道すなわち人の守るべき五つの道を正しくして、間違わない。私心のないのを世間の正直という。これは浅いところから次第に深いところに入る道である。また仏法の上で正直というのは、すべて因縁によってつくられたものは、虚妄にして夢幻のような偽であると悟って、本来自分自身は法の身であり、天然自然のままに働くのを本当の正直という。そもそも凡夫は、大病人である。仏様は、大医王である。凡夫は、自らの病を知らなければならない。生まれたり死んだりする迷いの中で、真理と背反した見方をする病がある。貪り惜しむ病がある。勇気を欠き道に背く病がある。三毒の心を根本として、無数の凡夫の病がある。この心を除滅するのが仏法である。これがどうして、世法と異なるものであろうか。異なることはあるまい(10)。

このような論法で、世法と仏法との間に浅深の差はあっても、その意図するところは同じと見ている。

また、武士は万民の秩序を守るべき任務を持つ人である。理を正して、義を行って、かつ不動の心を養い、身を捨てて主君に仕えるのが武士のあるべき道として、次の十七の心得をあげている。

①生死を守る心、②恩を知る心、③一陣にすすむ心、④因果の理をしる心、⑤幻化無常を観ずる心、⑥此身の不浄を観ずる心、⑦光陰を惜しむ心、⑧三宝を信仰する心、⑨此身を主君に投げうつ心、⑩自己を守る心、⑪捨身を守る心、⑫自己の非をしる心、⑬貴人主君の前に居する心、⑭仁義を守る心、⑮仏語や祖師の言葉に眼をつける心、⑯慈悲正直の心、⑰一大事恩縁を思う心(11)。

そしてこれらの美徳は、煩悩に打ち勝つ心から出てくるものとしている。

さらに、正三は逆に武士の悪徳もあげている。

①己を忘れて心をぬかす油断の心、②享楽生活の心、③義理を知らない心、④因果の理を知らない心、⑤無常を知らない心、⑥名聞利益を思う心、⑦華美に奢る心、⑧狐のように疑う心、⑨物事に執着している心、⑩弱々しく勇気がない心、⑪貪り惜しむ心、⑫他の是非を思う心、⑬我執自慢の心、⑭嫉妬の心、⑮恩を知らない心、⑯他を欺きたぶらかす心、⑰生死を忘れる心、である(12)。

武士たるもの、いちはやく私心を離れ、身を捨てる修行がまず必要なのである。しかし、それにはきちんと理を知り、義にかない、おのれの一身が役に立つような深慮がなくてはならないことになる。武士に、文武両道の修行が強調されることになるのは当然といえる。武士は、大きくは国家社会を守り固めていくという役割から、マクロ的な視野を、正三は求めていたといえよう。

正三の哲学は、明らかに禅宗系の大乗仏教といってよい。しかし、彼は仏教も儒教も元は一つであるといい、仏教の究極と五倫五常は一致するという。具体的には「恩」の道理は、「忠孝」に通ずると、正三は主張してい

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

る。正三自身は、武士の斬捨御免や主君への殉死、罪の連座制といった不合理な封建思想に対して強く批判している。また武士そのものをも、支配階級としてよりも職能として捉えているのだが、その正三が武士に求めたのは、主君の恩への報恩としての忠孝であった。主君への報恩と忠孝は、何ら矛盾するものではなかった。そして、忠孝は恩と報恩の思想と倫理の上に容易に日本人に広がったといえる。

6．農人日用

次に正三は、「農人日用」という項で、農民が農業に専心することで仏法修行が完成されるとことを主張している。

ある農民が聞いた。後生の一大事、すなわち死後の極楽往生を大切にして生前一心に修行することを疎かにしてはならないと思いながら、農業に追われて暇がなく、むなしい今生を過ごして、未来に苦を受けるのは、無念の極みである。如何にすれば、仏果に至ることができるであろうか、と。

答えていう。農業すなわち仏行である。それに心が入らない時は、賤業であるけれど、信心堅固であれば、菩薩の行である。

すなわち、農業がそのまま仏法修行となるかどうかは、農民の心の持ち方如何によって決まる。それゆえ、農業生活と別に信仰生活があるのではない。

暇を得て、後生を願おうとするのは誤りである。必ず成仏を遂げんとする者は、極寒極熱の辛苦の業をなし、鋤鍬鎌を用いて、煩悩の叢茂きこの身心を鋤き返し、雑草を刈り取り、身心を責めに責めて耕作すべきである。身に暇を得たときは、煩悩の叢がさらに茂るものである。辛苦の業をなし、身心を責めるときは、この煩悩が消える。つまり、常に仏行をなしているのと同じである。農民が、他にどんな仏行をする必要があろうか。

農民として生を受けることは、天より授かり給う世界養育の役人となることである。

この身一筋に天道に任せ奉り、仮にも己のためのみを思わないで、天道への奉公として農業をなし、五穀を作り出して、仏陀神明を祭り、万民の命を助け、虫類等にいたるまで救済の願いを施す大誓願を立てて、一鍬一鍬に、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称えて、他に余年なく農業をなせば、田畑は清浄の地となり、五穀も清浄食となって、食する人の煩悩を消滅する薬となるであろう。

人間の一生涯は、夢の中の夢である。身に余る薬を求めても、それは短い夢の間だけのことである。ひとえに後生の一大事を思い、勇猛の念仏間断なく、一念のうちに農業を行えば、知らず知らずのうちに誠の心がきわまり、大解脱、大自在の人となって、未来永劫、極楽浄土の楽を受けられることは必定である。信じて会得せよ、信じて会得せよというのである[13]。

すなわち、農業こそ天職との自覚を農民に促して、各自の職分に徹することが成仏に至るという強い信念を述べている。したがって、中村元氏が、

> すなわち貧富の別はすでに前世から定まっているものであるから、それを問題とすることなく、ひたすらに農務に精励せよというのである。人間の運命の予定（Predestination）と勤労の尊重という点で、ここにわれわれはカルヴィンの職業倫理説を思い起こさせるが、しかしまた、ここには、中世的な身分的区別肯定の観念と近代的な能動的活動的精神とが交錯しているとも解し得るであろう[14]。

というのは正鵠を得ているといえる。これについては、今井淳氏が、

> しかし結果的にはこの思想が封建道徳の強調に終わっていることは注意せねばならぬ[15]。

といっているのも重要である。

7．職人日用

江戸時代になると、城下町をはじめとする各地に職人集団が成立した。彼らの活躍には目覚しいものがあったが、職人は手間賃稼ぎが原則で、社会的地位も概して低かった。

『万民徳用』では、次に「職人」の職業倫理が展開される。ここでいう「職人」とは、その士農工商のうちの「工」に相当するものである。

ある職人が聞いた。後生の菩提が大切であると知っていながら、もっぱら家業と渡世に追われるのみの毎日で

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

ある。どのようにして仏果に至ればよいのであろうか、と。

答えていう。いずれの事業もみな仏行である。自らの生業において成仏すべきである。また一切の仕事は、すべてみな世界のためとなるということを知るべきである。世界の普遍的な真理の一仏、百億分身して、世界を利益するのである。

鍛冶の匠をはじめとして諸職人がいなければ、世界の用は足りず、武士がいなければ世は治まらず、農民がいなければ世界の食物はなく、商人がいなければ世界の自由が成立しないのである。

天地を究める人がおり、文章を作る人がいる。五臓を分けて医道を施す人がいる。その他ことごとく世のためとなるものは、すべてこれただ一仏の徳より発する作用である。

このようにありがたい仏性を、人間はみな具足するといえども、この道理を知らないで、われとわが身を賤しくし、悪心悪業をもっぱらとして、好んで悪道に入るのを、迷いの凡夫というのである。

眼に色を見、耳に声を聞き、鼻に香りを嗅ぎ、口に出してものをいって、思い巡らすことの自由が生じる。また手の自由、足の自由、ただこれ一仏の自由である。

まことに成仏を願うならば、まず自身を信じるべきである。自身はすなわち仏であれば、これは仏の心を信じることである。仏に欲心はない。仏に怒りはない。仏に愚かさもない。仏に煩悩はないのである。仏の心に悪事はない。この道理を信じないで、ひそかに貪欲を作り出して、怒りを発して、おろかさに陥り、日夜、我執・邪見・妄想に取りつかれて、苦悩の心やすむときなく、本来の自性を見失って、一生をむなしく大地獄の中に過ごし、未来永劫の住処としてしまうことを、悲しまずにはいられないのである。

これを恐れて、これを嘆いて、後生一大事の志を励まし、真実勇猛の念仏をもって生業と仕事をなせば、機の熟するにつれて、自然の誠の心至極にして、ついに自己の真仏顕然たるべきである。一筋に信仰せよ、信仰せよというのである[16]。

8．商人日用

正三は、武士、農人、職人の「職業倫理」を述べた後に、「商人日用」すなわち商人の「職業倫理」を展開している。正三の職業倫理の中で、最も興味深いのは、商人であろう。そもそも、多くの宗教は利益を増すように活動することに対して、肯定的ではなかった。

ある商人が聞いた。たまたま人間界に生をうけながら、つたなき売買の業をなし、利を得んとする心休むときなくて、菩提に進むことかなわず、無念の至りなり。教えを垂れたまえと。

これに対して正三は、商人は利益を追求すべきであるとしている。

答えていう。売買せん人は、まず利益を増やす心遣いを修行するべきである。その心遣いとは、身命を擲って、一筋に正直の道を学ぶことである。正直の人には、仏法を守護する神々の恵み深く、仏陀神明の加護があって、災難を免れて、自然に福を増して、衆人に愛敬されて、万事心にかなうようになる。これに対して、私欲をもっぱらにして自他を隔てて、人を抜いて利益を得んとする人は、天道のたたりがあって、禍を増し、万民の憎しみを受けて、衆人の愛敬なくして、万事心にかなわざる仕儀にいたる。

すなわち、人を喜ばして自分も儲けるという立場で、正直な心で利得を追求するようにと教えている。悪い心や手段によって儲けるのを「有漏善」といい、人を楽しませずに地に落ちてしまうという。道理にかなったものが「無漏善」である。そこで、「無漏善」が商人の職業倫理の中心となっている。

この売買の作業は、国中の自由をなさしむべき役目の人々に、天道より与えられたところと思い、身を天にまかせて利を得んとする心たゆみなく、常に正直を旨として商いすれば、火が乾いているものにつき、水が低いほうへ流れるように、万事心にかなうに至るべきであるといっている[17]。

芹川博通氏は、

> ここに展開されている正三の仏教的職業倫理と、そこにみられる彼の経済倫理は、近代西欧の資本主義の精神を生みださせた禁欲的プロテスタンティズムの倫理に匹敵する規模の大きなものである[18]。

という。同様に、中村元氏も、

> ここにおいてかれは、ある意味における決定論（Determinismus）を承認しながら、すでに決定せられた境地に安住して、人間の自由を実現しようとするのである。『商人なくして世界の自由あるべからず。』ここで

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

正三のいう「天」「天道」の代わりに「神」を、「自由」の代わりに「神の救い」を置くならば、殆どそのまま、カルヴィニズムに由来する西洋近代初期の資本主義倫理を見出し得るではないか[19]。

といっている。

さらにこの世に身を擲って、一筋に国土のため万民のためと思い入れて、自国のものを他国に移して、他国のものをわが国に持ち来たりて、諸人の心にかなうべしとの誓願をなし、国々を巡ることは、悪業や四障を滅ぼす修行であると心得て、山々を越えて、大河小河を渡って心を清め、漫漫たる海上に船を浮かべるときは、身を捨てて念仏し、自然に菩提心成就して、ついには無碍大自在の人となり、天地に独歩すべきである。この理、堅固に用いよ、用いよというのである[20]。

江戸時代の中期には、商品流通経済が進み、次第に商人の東奔西走の活躍が目立ち始めるのであるが、身分的には最下位に置かれて、卑しめられていた。その商人を世界の自由を作る人と呼び、利潤の追求を積極的に是認して、一般民衆の利益を増進することを心がけるようにも説いている。日本人の商売熱心は、こうした精神的基盤と決して無縁ではないのである。

商売は熱心に、しかも不純な動機と不正な手段は用いず、正直に勤勉に、合理的に利益を追求して働くことは大いなる善である。人を騙すことや、いたずらに私利私欲をむさぼるのが、悪なのである。

鈴木正三のこの倫理観は、日本人の経済活動の理想として作用してきたものではないだろうか。正直、勤勉、倹約といった倫理徳目は、あまり豊かではなかった日本人が共に生きるための知恵として、受け入れる余地があったとしても、正三の主体的思索によって、体系的に哲学化されて日本人の精神的基盤となったのである。

9. おわりに

人間は健康である限り、一生を一定の職業に就いて働いて過ごすのであるから、職業倫理が如何に重要なものであるか、個人にとってもその社会にとっても、大きな問題である。

近世のはじめに、鈴木正三が日本人の宗教的・思想的な伝統の上に、こうした職業倫理を打ち出したのは、まことに意義深いことといえる。その職業倫理は、職業そのものを一仏の分身とみなしているために、すべて平等で貴賤がなく、僧侶としても決して上ではないのであった。各自が自分の職業に、全身を投入して、私心なく励むならば、それは仏行に等しく成仏するというものであった。藤吉慈海氏は、

職場での各自の職業に精進することが成仏の道であると教え、仏教的な職業観を持つに至った[21]。

と述べている。

時代は厳しい身分社会で、武士が最上位の階級であって、農民、職人、商人は下級の職業とさげすまれていたのを、堂々と平等をいい、むしろ曼荼羅のような職業観を打ち出している。そして勤労は、我執の念を除き、本来の仏心を磨きだす修行の意味を持ち、まさに自己を救済する営みと把握している。したがって、自分の職業に愚痴や不平をいうのは愚かであって、「天職」という自覚がもっともふさわしいものであった。わが身を信じ、自分が仏になること、ここに天職をみている。

また、出家して僧侶になり、道場で恭敬拝礼して勤行しても、自身が我執の念を去らなければ何の意味もないといい、ひどく批判的である。出家したいという人を思い留めさせたりもしている。これをみても正三の職業哲学は、天職説であったといえる。

職業倫理の方も、基本的に「世法即仏法」であり、禁欲的職業倫理である。すべての職業を修行として自己を磨いて、自己を救済していく、日本人の職業倫理を表出したのである。こうした職業活動と職業倫理は、基本的には、現在も日本人の中に生きているといえる。

とはいうものの、日本人の職業倫理は時代の変化の中で少しずつ修正されてきているといわなくてはならない。まず、職業を成り立たせている実際の仕事が、現代の日本社会では極端に分業化され、機械化されていることである。昔のような全人格的な仕事の感触が失せつつある。したがって、職業というものを「職能」と捉えなおして、企業という存在を介して巨大な経済社会共同体に連なっていると考えるのが妥当になっている。

たとえ流れ作業の末端の位置にいたとしても自分の仕事、自分の職能は社会的な意義があり、貢献しているのだから、疎かにはできないのだという自覚が求められる。とりわけ現代は、国際社会の中に生きているところから、地球規模の恩恵の認識と行動規範が職業倫理に求められているといえよう。

NII-Electronic Library Service

Fukushima National College of Technology

第二は、現代人から宗教的観念が急速に失われ、合理主義、享楽主義が取って代わっているという事実である。このため、正三が説いたような宗教的意義を職業に結びつけることは無理になったといえる。しかし人間は誰でも、「自己」や「人生」というものをどこかで考え、意義づけをせずにはいられない存在である。宗教心は薄れたとしても、エートスとしての倫理に基づいて、職業活動を通じて人格を陶冶し、自己完成を目指して、責任の伴う創造を行っていくというのが現代の職業倫理の大きな意義とおもわれる。

第三に、職業倫理の存在が企業の倫理に大きく影響することである。改めて説明する必要もないことであるが、職業倫理を企業成員が主体化することで社会的信用を得て、仕事の能率、品質の向上、人事面の円滑化をはかることができる。したがって、企業にとってもきわめて重要であることは当然である。自社の利益の追求だけに終わることなく、可能な限り広範囲な自然環境的・国際的・社会的な観点に立っての利他的な企業倫理を組織体として確立することが必要である。だからといいて、スローガンを掲げて、徳目を押し付けるのでは意味がない。倫理とは各人が考えて、主体化してこそ倫理なのである。企業の倫理も大切であるが、同時に精神的伝統の中で各人が考えていくという方向を持ち続けるべきである。

職業倫理の有無は、単に一企業の問題でないことはいうまでもない。いまや日本経済全体の運命がかかっているといっても過言ではない。本稿で考察したように、わが国には職業倫理の伝統があるので、これを時代に適合させて継承発展させて、経済活動の柱としていくことが望ましいといえよう。

註

（1）鈴木正三からの引用は、『仮名法語集　日本古典文学大系 83』宮坂宥勝校注、岩波書店、1964 年により、頁数を記す。267 頁参照。
（2）同、265 頁。
（3）同、247 頁参照。
（4）同、262－263 頁。
（5）同前。
（6）同、263 頁。
（7）同、265－266 頁参照。
（8）同、276 頁。
（9）同、275－276 頁。
(10) 同、267 頁参照。
(11) 同、270 頁参照。
(12) 同、271－272 頁参照。
(13) 同、273－275 頁参照。
(14) 中村元『近世日本の批判的精神』1965 年、93 頁。
(15) 今井淳『近世日本庶民社会の倫理思想』理想社、1966 年、56－57 頁
(16)『仮名法語集』、275－277 頁参照。
(17) 同、277－278 頁参照。
(18) 芹川博通『いまなぜ東洋の経済倫理か ― 仏教・儒教・石門心学に聞く― 』北樹出版、2003 年、61 頁。
(19) 中村元『日本の近代性』春秋社、1964 年、157 頁。
(20)『仮名法語集』、279 頁参照。
(21) 藤吉慈海『鈴木正三の禅』禅文化研究所、1984 年、175 頁。

NII-Electronic Library Service